

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0991000118		
法人名	医療法人社団 湘風会		
事業所名	グループホームレガーロ		
所在地	栃木県那須塩原市三島4丁目28-2		
自己評価作成日	平成28年10月5日	評価結果市町村受理日	平成29年6月6日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク		
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189		
訪問調査日	平成28年10月13日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

家庭的な日常生活を共に過ごして頂くことに力を入れています。朝の掃除であったり、毎日の散歩そしてお味噌汁作りなど出来る事を可能な限り一緒に楽しみながら行っております。それからの課題として、地域の中のグループホームとしての立ち位置をしっかりと見据えて連携に努めていきたいと考えております。何よりも地域の中で親しみ易い・行き易い居心地の良い場所のなれるよう努めていきたいと思っております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

田畑に囲まれた当事業所は、窓から自然豊かに四季を楽しむことができる立地にあり、利用者は毎日の散歩で季節の移り変わりを感じることができる。「ゆっくり いっしょに 楽しみながら」の理念を掲げ、職員は、常に利用者のペースに合わせ、傍らに寄り添いながら、お互い笑顔で活動を行っている。朝の掃除に始まり、調理、散歩、作品作りなど日常の各活動について、利用者が自身の力を十分に発揮しながら生き生きと生活ができるよう、さりげない支援を実践している。テラスの前に作られた畑で、利用者と職員が芋を育て、秋のこの季節は芋煮会に向けて畑作業を行っている。近くの保育園との交流事業を実施し、年長児が園から歩いて事業所を訪問し、お遊戯を見せてくれたり、肩叩きをしてくれるなど和やかな交流が行われている。また、地域の祭りに参加したり、お茶会を開催し地域の方々へ訪問してもらうなど、地元で溶け込んだ運営を行っている事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ゆっくりいっしょに楽しみながらの理念の下、入居者のペースに合わせ、共に生活する事を大切にしたり関わりを心がけている。「その人らしく」充実した生活が送れるよう支援している。	「ゆっくり いっしょに 楽しみながら」の理念を掲げ、職員は、常に利用者のペースに合わせ、傍らに寄り添いながら、お互い笑顔で各活動を行っている。調査時も居間にて調理を共にしている姿が見受けられた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	天候が良い日は、施設周囲の散歩を行い、地域住民と挨拶したり、保育園園児と手を振ったりして交流を心がけている。地域での催しにも参加するように心がけている。又、近所の方がお花を届けて下さることもある。	併設の小規模多機能事業所が開催するオープンカフェに利用者が参加し地域と交流を持っている。近くの保育園との交流事業を実施し、年長児が園から歩いて事業所を訪問し、お遊戯を見せてくれたり、肩叩きをしてくれるなど和やかな交流が行われている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	自治会に加入し、地域の行事ふれあい祭りに参加することが出来た。又、事業所行事に施設地域住民の参加を声掛けしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議内で出た意見を参考により良い施設作りにつなげられるよう努力している。	会議メンバーの自治会長からの紹介で地域の祭りに参加したり、地域の防災訓練に参加して、顔を覚えてもらうことにしている。会議では相模原での事件をとりあげ、不審者対応と事業所の開放の兼ね合いが課題となっていた。地域交流の一環でオープンカフェを催しているが、危機管理の観点から自治会長に協力してもらい、不審者対策を講じていた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	那須塩原市ケアマネ連絡協議会や外部研修都合がつく限り参加している。必要時には、市役所や包括への相談を行っている。	市の職員は運営推進会議メンバーに入っており、地区の連絡協議会等でも連携を図っている。最近の福祉施設での事件や事故、災害を受け、マニュアルの整備や見直しをしているが、行政からも情報などの面で協力をもらうこととなっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	入居者の安全の為、昨年はやむを得ず玄関の施錠を行っていたが、今は日中帯施錠せずに対応できるようになっている。	身体拘束は勿論、日中の玄関施錠も行っていない。定例会や研修を通して、職員間で意見交換を行い、ケアの実践でも見守りの方法を工夫したり、併設事業所の職員や事務職員の協力も得て、職員間の連携で安全が確保できている。ケアの質の向上にもつながり、職員からも好意的な意見が多い。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	施設内や外部研修にて学ぶ機会を得ている。入居者の対応についても職員間で対応方法を常日頃確認している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	施設内の研修でケアマネージャを中心に話し合いを行いスタッフ間で理解の共有を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約は、管理者が対応し十分な説明を心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	職員に対しては日々の申し送りや月1回の定例会議にて情報を共有化努めている。	利用者からは日々の関わりの中で思いを汲み取り、家族からは面会や通院、お茶会などの来所する機会を通じて意見を聞くようにしている。以前、清掃について家族からの要望があり、ただ清掃をしっかり行うだけでなく、利用者とともに時間をかけて行い、利用者の思いも反映させる対応に繋がっていた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定例会議等で意見や提案を聞く機会がありそれを活かすよう努めている。	月に一回の定例会議では「業務見直し」の議題が度々あがっている。利用者と一緒に調理をもっと楽しめるようにと、なべ物やホットプレートを使った調理を提案したり、業務スケジュールの改善、記録の取り方など様々な提案がなされ、運営改善が図られている。	定例会議や日々の相談等で、運営者も含めた全職員で意見交換を行っているが、お互いの運営に対する思いがさらに共有できるよう、運営方針や、支援の方向性の統一などの話し合いがより深まることを期待したい。
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	できる限り労働条件の改善に取り組んでいる。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	事業所内研修や合同研修を通して、学ぶ機会を設けている。資格習得への協力体制もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	那須塩原市のサービス事業所連絡会を通して同業者との交流、情報交換を行っている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	サービス利用前に本人と面談を行い、ご本人の状態確認と思い等を汲み取れるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス内容の確認を行いながら、ご家族の意向を聴取している。心配、不安がない様に確認を何度も行いながら話の傾聴に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居前の事前訪問、判定会議を行い、サービスの利用に適しているかを判断している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	家事等積極的に行っている。入居者の出来る事、得意とされている事を見つけ職員も一緒に行っている。本人の役割を見つけ継続出来るよう努力している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日頃の様子をご家族へ報告したり、以前の生活歴を聴取したりすることでご家族との関係作りを行っている。面会だけではなく、行事で家族も参加できるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会に来られた知人様に対しては、今後も気軽に来て頂けるように声かけしている。生きがいサロンへ行っている方もいて継続して行けるよう配慮している。	面会に来た知人等とゆっくりとした雰囲気での交流ができるよう、面会場所等の工夫を行っている。入居前の地域との交流を継続したい利用者のために地元の生きがいサロンに継続して通えるよう、サロン担当者と利用の調整をしたり送迎をしたりと、馴染みの関係が保てるよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず に利用者同士が関わり合い、支え合えるような 支援に努めている	利用者同士と一緒に活動を行えるように配慮し ている。活動中はその人に合った作業を提供し、 一か所で皆で行う工夫をしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関 係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の 経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もいつでも相談できる場であることを ご家族に伝え、安心して頂けるように配慮し ている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握 に努めている。困難な場合は、本人本位に検討し ている	入居者に希望や意向を聞く機会を設けてい る。本人の思いに目を向け、表情や言動を 良く観察しながら意向確認もするようにして いる。	利用者の思いや意向を把握するため、職員は本人 が話し易い場面や時間をを設定したり、本人の 日々の様子から、笑顔が出ていたり、意欲を示した 場面を把握しておき、本人の意向を掴むようにし て、介護計画に反映させ、活動に活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環 境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努 めている	本人、ご家族から話を聞く事で情報收拾に 努めている。それをふまえ、今後の支援に活 かしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する 力等の現状の把握に努めている	本人の生き方、考え方、個性に配慮しそ の人の中身を知る努力をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方 について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、そ れぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した 介護計画を作成している	定例会議やサービス担当者会議の開催にて 情報共有を図っている。また、本人及び家族 の意向を取り入れる努力をしている。	各利用者担当の職員のモニタリングを基に、申し 送りや定例会議等を活用してケアマネジャーが聞き 取りを行い、計画を作成している。計画作成に参 画する職員は「笑顔が出るような」「本人の意欲を引 き出せる」ような計画作成に取り組んでいる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を 個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら 実践や介護計画の見直しに活かしている	個別経過記録や申し送りノート、3か月に1回 のモニタリングをケアスタッフと行う事で情報 の共有化を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	日々の申し送りにて入居者の状況を判断したり、スタッフとの会話のなかでもニーズを把握し解決に導く努力をしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源については市役所や地域住民からの情報収集に努めている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	主治医との連携において書面や受診同行を行っている。入居者してからもかかりつけ医を継続してもらおう家族へ協力して頂いている。家族が通院介助行えない方は訪問診療を利用して頂いている。診察時には職員が状態を報告している。	基本的には入居前のかかりつけ医を継続し、通院介助は家族に担って貰っている。その場合、利用者の状態を書面にして家族に託したり、必要があれば職員が同行して状況を説明することもある。利用者の中にはホームへの往診を利用している場合もあり、職員、特にケアマネジャーが立ち会って受診している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内に専従の看護職はいないが体調の変化があった際は、すぐに併設の小規模多機能型施設の看護師にアドバイスをもらって適切な支援ができるように努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には情報提供を行い、本人の状態をしてもらう。常日頃より病院のソーシャルワーカーとの関係作りにも努めている。本人が入院中、面会を行ったり看護師やMSWからの情報収集に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	急変時の対応については、家族の意向を十分に確認を行い、スムーズに受診出来るよう急変時の連絡体制を整えておくようにしている。	現在の体制では、医療依存度が高くなった利用者への支援には限界が有り、利用者が重度化した場合には病院や他の施設へ移って貰っている。前回の評価結果を受けて作った目標達成計画の項目の一つが、重度化やターミナルケアに対する職員のスキルアップを図ることである。勉強会のスケジュールの中にターミナルケアの研修を組み入れて、職員の支援力アップにつなげていきたいと考えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応方法や連絡体制を整えてマニュアルを作る事でスタッフ全員が落ち着いて対応できる様にしていきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回避難訓練を実施している。地域住民の協力も依頼している。今後、前回参加できなかった職員も参加できるようにしていきたい。	前回の評価結果を受けて作った目標達成計画の項目の一つが防災体制の強化であった。その中で、緊急時に職員の誰もが適切に対応できるようにすること、地域住民、特に自治会長と民生委員に協力を得ることがあげられている。6月に実施した火災避難訓練では、民生委員の参加が得られている。11月には夜間を想定した避難訓練を予定しており、併設事業所と合わせて夜間の職員2名で、初期消火と通報・連絡、利用者避難の訓練を実施し、職員の対応力向上を図る予定である。	相模原市の障害者支援施設での事件や岩泉町のグループホームでの豪雨災害を受けて、防犯体制や災害対応について運営推進会議で取り上げられた。法人では統一したマニュアルの見直しや策定を検討している。事業所でも地域の特性に応じたマニュアルの見直しについて話し合う必要がある。火災や災害時には近隣住民の協力が欠かせない。地域への事業所の開放と防犯との板挟みで悩ましいところであるが、地域との交流を重ねる努力の中で解決策を模索してほしい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	丁寧語を使用し、入居者へ伝わりやすい言葉かけを行っている。プライバシーについては、状況により扉を閉めたり、居室等で話を聞くように対応している。	居室の配置などはプライバシーに配慮したものになっていて、基本的には居室の扉は開けたままにはしないことになっている。事業所では常に接遇の向上やその中でも丁寧な言葉遣いの使用を指導している。家族からは「職員が皆優しく、対応が良い」との一致した感想が聞かれる。ただ、職員からは、言葉は丁寧でも実際の支援や対応方法が雑だと違和感があり良くないとの反省の声もでている。	利用者と職員との距離感を端的に示す言葉遣いをどうするかは、介護の現場の永遠の課題である。事業所の皆さんで常に話し合っ、ふさわしい言葉の使い方を見つけ出してほしい。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人との会話の中で本人が望む事を見つけている。選択できる場も設けて本人に決めてもらうよう配慮もしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	時間を気にせず、時間がかかる事でも見守りを行ったり作業の声かけも反応を見ながら無理強いしないようにしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	支援に努めている。服と一緒に選んだり、時々には化粧品やマニキュアを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の下ごしらえ、ホットプレートを使用し一緒に調理を行っている。	キッチンがホームの中央に配置され、比較的広いスペースが確保されていて、車椅子でも使用できる流しと調理台も設置されている。朝食は夜勤職員が調理し、夕食は業者の半調理品を利用している。昼食は利用者が野菜の刻みや下ごしらえに参加して、調理内容によってはテーブルでホットプレートを利用して一緒に調理することもある。食事は職員も一緒にテーブルを囲みながら、和やかな雰囲気を進めている。以前はテレビをつけたままだったが、食事に集中できないという弊害もあったため、現在は童謡などの懐かしい曲を流し、早く食べ終わった利用者は曲に合わせて口ずさんだりして他の人が食べ終わるのを待っている。利用者は自主的に下膳などをしており、食器ふきを手伝うこともある。活動にうどんや恵方巻き、パン、おまんじゅうなどの手作り料理を取り入れており、利用者の励みや楽しみとなっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	一人ひとり苦手な食べ物や噛みにくい物等に配慮しながら提供している。水分が摂れない時はゼリーなど好きな物で水分が摂れるよう調整している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声かけ、誘導、見守りを行っている。自力で出来ない方には、介助で実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を使用し、トイレへの声かけ誘導を行っている。日中帯はトイレ誘導にて失禁を減らす努力をしている。	夜間はおむつを利用する場合でも昼間はトイレで排泄できるようにとの目標をもち、利用者一人ひとりに合わせた排泄支援ができるようにと、日々チェック表をつけて排泄パターンを見つけトイレでの排泄を誘導している。認知症が進み、排泄の仕方に混乱を来した場合には、いろいろと試してみて改善のための良い方法を見だし、介護計画に反映させて職員間で支援の仕方を共有している。外出時はトイレを済ませ、パッドなどを十分用意して出かけるが、利用者が緊張感を保っているせいで混乱が無くすんでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	腸の働きが良くなるように、毎日運動や室内歩行、腹部マッサージで便秘予防に取り組んでいる。便秘気味の方には、食事と水分量にも気にかけている。ひどい場合は、主治医へ相談を検討する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	定期的に入浴できる様配慮している。本人の機嫌や体調に合わせてゆっくり入浴できるように支援している。	浴室には三方向から介助できる個浴槽が設置され、一人ずつ入浴している。ほとんどの利用者は定期的に入浴する習慣ができていますが、中には入浴をいやがる人もいます。そのような場合には、入浴を誘う時間帯を変えたり、声を掛ける職員が交替したりして、状況を見ながら入浴を誘い、うまくいった方法を職員間で共有している。職員は利用者の入浴介助の時間が一人ひとりとゆっくり話せるよいチャンスととらえて、積極的に活用している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中帯、活動を促し夜間安眠できるようにしている。居室の照明も入居者が安心できるように調整している。ベッドメイキングや布団干しなども行い、衛生面にも気をつけ安眠につなげている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方用紙を各個人ファイルに保管し、内服薬の管理はダブルチェックしている。内服薬は、必ず口に入れ飲み込むまで確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	全員で行う事もあるが、個人が得意としている事や好きな事を聞き、楽しみを優先している。また、気分転換を図れる様、外出機会も確保している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	良天時には散歩出かけたたり、月2回程度はスーパーへ買い出しに出かけている。ドライブにて気分転換を図っている。	全ての利用者が外の空気に触れ、地域との関わりを多くしてほしいと職員は願い、散歩に出かけたたり、買い物兼ねたドライブに行ったりしている。近くの神社から秋祭りのお囃子が聞こえてきたので出かけてみたり、誕生日の月には外食に出かけたり、前から参加していた生きがいサロンに出向く支援をしたり、いろいろと外出の機会を作っている。	職員からは、利用者にもっと外とのつながりを持って貰いたい、との意見が出ている。職員配置が厳しい中、どんなことができるか、利用者一人ひとりの可能性を勘案しながら、さらに工夫を重ねていただきたい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣い銭を金庫で預かっている。外出時やパン屋来所時に入居者が支払いを行うことが出来るよう、今後支援していきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	相手からかかってくるのであればお話できるが本人自ら電話する事がないので希望時には、支援していきたい。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節に合った壁紙作りを職員と入居者で行い、作ったものを共用空間に飾っている。又、毎日清潔が保てる様、職員と入居者全員で掃除を実施。細かい所は、職員が配慮し掃除を実施している。	食堂を兼ねる居間はキッチンを挟んで2箇所あり、片方は併設の小規模事業所との間の壁を開け放すと広い空間が出来て、合同の行事などに利用できる。こちら側には併設事業所と行き来できるような広いテラスがあり、田んぼの見える見晴らしの良い場所になっていて、ここで食事することもある。もう一方の居間の前にもテラスがあり、その外側には利用者と職員と一緒に作る畑があり、作物の生長や収穫が楽しみとなっている。居間の他にも2畳ほどの畳スペースがあり、光庭に面した場所にもソファが置いてあって、利用者が好き好きに使っている。	季節ごとに利用者と職員と一緒に手がける貼り絵や折り紙の壁紙が飾られていたり、行事の写真が飾られている。利用者の作品を展示するのは、利用者の励みや家族の楽しみにもなっているが、ともすると乱雑に見えることもあるので、飾り方にも気を配って心地良くすることを心がけてほしい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	少し離れた所に椅子置いたり、ソファでくつろげるようにしている。休息したい時には居室で休んでもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご自宅より使い慣れた物や思い出の写真等を持参して頂いて、その方に合った配置にしている。	居室はカーテンの色と壁紙が部屋ごとに異なり、部屋の並びが直線的で無く凹凸がある。入り口にはそれぞれに別の花の図柄を配したプレートが掛けられていて、自分の部屋が分かりやすくなっている。トイレも居室近くに設置されているため、自分専用ということではないが、好きなトイレを決めて使っている。共同の住まいではあるが個別性が重視されている。事業所がベッドと洗面台、エアコン等を設置し、利用者は箆笥や机、衣裳掛等好みのものを持ち込み、家族の写真や作品、花などを飾って自分らしい部屋づくりをしている。居室で利用者はアルバムを見たり、日記を書いたり、昼寝をしたりして思い思いに過ごしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室やトイレが分かるよう目印をつけている。入居者の訴えや何かを探している時にはその都度職員が声かけ、誘導している。		